

平成 22 年 5 月 14 日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19730532  
 研究課題名（和文）  
 小・中・高一貫性に基づく歴史教育カリキュラム開発のための基礎的研究  
 研究課題名（英文）  
 Basic Research on Curriculum Development of History Education between Elementary and Secondary School  
 研究代表者  
 山田 秀和（YAMADA HIDEKAZU）  
 岡山大学・大学院教育学研究科・准教授  
 研究者番号：50400122

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、小・中・高一貫性に基づく歴史教育カリキュラム開発の方法論を探ることである。研究の成果は、次の点にある。（1）アメリカ社会科における小・中・高の歴史教育の位置づけを類型化し、その編成のしかたを明らかにしたこと。（2）授業構成における小・中・高の連続性を見出したこと。（3）以上の分析結果を応用して、日本史を事例とした小・中・高の授業モデルを構想したこと。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the methodology of development of history curriculum between elementary and secondary school. What have been done through this study are as follows: (1) to classify and analyze the position and organization of history education in K-12 social studies curriculum in U.S.; (2) to clarify the continuity of teaching history in elementary, junior high and senior high school; (3) to design lesson plans on the subject of Japanese history between elementary and secondary school.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	330,000	2,430,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：社会科，歴史教育，小・中・高一貫，カリキュラム，授業構成，アメリカ

## 1. 研究開始当初の背景

今日一般的になされている歴史教育は、小・中・高と学校段階が上がるにつれて、より細かな事象を提示するように編成されている。しかし、それは、現在を生きる子ども

にとって繰り返し学ぶ意味の見出しにくいものになっている。

この原因の一つは、小・中・高の歴史教育が、社会認識教育（小・中の社会科，高校の地理歴史科・公民科）全体の一貫した教育目標との関連で議論されてこなかったことに

ある。歴史それ自体をより詳しく知らせることが当然視され、「何のために」という教育的な大前提が見失われていた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、小・中・高一貫性に基づく歴史教育カリキュラム開発の方法論を探ることである。特に、社会認識教育全体との関連性から小・中・高の歴史教育を捉え直し、カリキュラム編成のしかたを原理的かつ具体的に究明する。

この目的のために、本研究では、アメリカ合衆国（以下、アメリカと略記）の社会科に着目した。なぜなら、アメリカでは、社会科について大きな影響力を持つ全米社会科協議会が、カリキュラム開発の指針（基本文献は、National Council for the Social Studies, *Expectations of Excellence: Curriculum Standards for Social Studies*, 1994）を示して以来、各州でそれを応用した独自の小・中・高一貫社会科カリキュラム・スタンダードが開発されているからである。これらのスタンダードにおいて、小・中・高の歴史教育は、社会科全体の目標のもとに組織され、カリキュラムが編成されている。以上より、本研究の目的を達成するための示唆を与えてくれるものと推測した。

## 3. 研究の方法

以下の方法・手順で本研究を進めた。

### (1) 資料収集・資料調査

全米社会科協議会が出版している学術誌や理論書を中心に収集した。同時に、各州の社会科スタンダードをHP等で入手した。詳細については、州の教育局や社会科教育の研究者、全米社会科協議会の大会を訪問し、ヒアリング等による調査を行った。また、教科書や教材も収集した。

### (2) 歴史教育の位置づけと機能の類型化

アメリカ各州の社会科を概観し、歴史教育について二つの傾向性を見出した。一つは、歴史教育（地理教育も同様）が、社会科カリキュラムの中に一貫性・整合性を持って統合されているタイプである。もう一つは、歴史教育が、社会科カリキュラムの中で独立性を有し、分化的傾向を示しているタイプである。

### (3) 事例分析 I

統合的傾向が見られるオハイオ州の社会科カリキュラム（基本文献は、Ohio Department of Education, *Social Studies*

*Academic Content Standards*, 2002) を分析した。小・中・高一貫性の論理およびそれぞれの単元／授業構成の原理を解明した。

### (4) 事例分析 II

分化的傾向が見られるニューヨーク州の社会科カリキュラム（基本文献は、The University of the State of New York / The State Education Department, *Social Studies: Resource Guide with Core Curriculum*, 1999）を分析した。小・中・高一貫性の論理およびそれぞれの単元／授業構成の原理を解明した。

### (5) 事例分析 III

先の類型に基づく個別分析とは視点が異なるが、小・中・高でどのように子どもの認識を開けばよいのかについて、M. A. ラフリンと H. M. ハートニアンの社会科モデル（基本文献は、Margaret A. Laughlin, H. Michael Hartoonian, *Succeed with the Standards in Your Social Studies Classroom*, J. Weston Walch, Publisher, 1997）を分析した。

### (6) 小・中・高一貫歴史教育の授業モデル構築

以上の分析結果を応用して、日本版の小・中・高の歴史授業モデルを構想した。

## 4. 研究成果

本研究の成果を、三点に絞ってまとめたい。一点目は、小・中・高の歴史教育における連続性と段階性について。二点目は、開かれた社会認識形成について。三点目は、以上の成果を応用した授業モデルの開発について、である。個別に整理しよう。

### (1) 小・中・高の歴史教育における連続性と段階性

①統合的傾向の場合—オハイオ州社会科—  
統合的傾向が見られる社会科の事例として、オハイオ州のカリキュラムを分析した。オハイオ州の社会科カリキュラムは、表1のようになっている。

スコープは、「歴史」「社会の人々」「地理」「経済」「政治」「市民の権利と責任」「社会科技能と方法」の七つであり、人文・社会諸科学を中心にしつつ、市民の権利や責任、技能を学ばせるようになっている。シークエンスは、学年段階の上昇に合わせて空間と時間を軸に学習対象を拡大し、最終的に市民としての実践的な資質を育成するように組織されている。

このように構成されるカリキュラムにおいて、小・中・高の歴史教育における連続性

と段階性は、以下のようになっていた。

表1 オハイオ州社会科の全体計画

学年	学習内容
K	時間と空間における子どもの生活の場
1	家族の現在と大昔, 近くと遠く
2	ともに働く人々
3	コミュニティ: 過去と現在, 近くと遠く
4	オハイオ: その過去, その位置, その政治
5	北アメリカの地域と人々
6	世界の地域と人々
7	紀元前 1000 年から 1750 年までの世界研究: 古代文明から最初のグローバル時代まで
8	1607 年から 1877 年までの合衆国研究: 植民地時代から再建期まで
9	1750 年から現在までの世界研究: 革命の時代から 20 世紀まで
10	1877 年から現在までの合衆国研究: 再建期後から 20 世紀まで
11	政治的経済的決定
12	シティズンシップに向けた準備をする

(Ohio Department of Education, *Social Studies Academic Content Standards*, 2002 より作成)

事実の認識を中心とした歴史の読み解き方(視点)の学習(主に初等)→解釈・理論(社会科学的理論)の認識を中心とした現代社会の成立過程の学習(主に中等前期)→価値・思想の認識を中心とした, 今後に向けた歴史とのかかわり方の学習(主に中等後期)。

分析を通して, 過去, 現在, 未来を関連づけ, なおかつ, 事実, 解釈・理論, 価値・思想を連続的に学ばせるという一貫性を読み取ることができた。

## ②分化的傾向の場合

### —ニューヨーク州社会科—

分化的傾向が見られる社会科の事例としてニューヨーク州のカリキュラムを分析した。この社会科カリキュラムは, 表2のようになっている。

スコープは, 「歴史」「地理」「経済」「市民, 市民性, 政治」となっている。この社会科のシークエンスをみると, わが国のカリキュラムと同様に, 現在に至る歴史(自国史)を小・中・高で繰り返し学習させるように計画されている。

このように構成されるカリキュラムにおいて, 小・中・高の歴史教育における連続性

と段階性は、以下のようになっていた。

表2 ニューヨーク州社会科の全体計画

学年	学習内容
K	自分と他人
1	私の家族と他の家族, 今と大昔
2	私のコミュニティと合衆国の他のコミュニティ
3	世界のコミュニティー人々と場所についての学習
4	地域の歴史と地域の政治
5	合衆国, カナダ, ラテンアメリカ
6	東半球
7	合衆国とニューヨーク州の歴史
8	
9	グローバルな歴史と地理
10	
11	合衆国の歴史と政治
12	政治への参加・経済と経済的意思決定

(The University of the State of New York / The State Education Department, *Social Studies: Resource Guide with Core Curriculum*, 1999 より作成)

過去と現在の関連づけの学習(主に初等)→学際的な社会研究の学習(主に中等前期)→過去の評価・問い直しの学習(主に中等後期)。

本カリキュラムの分析により, わが国の社会認識教育の体系に即して歴史教育の一貫性を考えるための示唆を得ることができた。

## (2)小・中・高の社会科および歴史教育における開かれた社会認識形成

「開かれた社会認識形成」という視点から小・中・高のカリキュラムを考察するために, M.A. ラフリンと H.M. ハートニアンが社会科モデルを分析した。この社会科は, 表3のように計画されている。(なお, ここでは, 歴史教育を含めた社会科カリキュラム全体に

表3 M.A. ラフリンと H.M. ハートニアンの社会科モデル

学年段階	内容の焦点
初等前期 (PK-2)	世界に対する私の位置づけ
初等後期 (3-5)	私の世界の地平を拡大する
中等前期 (6-8)	異なる視点から世界をみる
中等後期 (9-12)	変化しつつある世界で豊かな市民性を身につける

(Margaret A. Laughlin, H. Michael Hartonian, *Succeed with the Standards in Your Social Studies Classroom*, J. Weston Walch, Publisher, 1997 より作成)

ついでに分析を中心に行った。)

この社会科は全米社会科協議会が提示した 10 のテーマ（「文化」「時間、連続性、変化」「人々、場所、環境」「個人の発達とアイデンティティ」「個人、集団、制度」「権力、権威、統治」「生産、消費、分配」「科学、技術、社会」「グローバルな関係」「市民の理念と実践」。実質的にスコープとして機能している）をもとに編成されている。

分析の結果、このカリキュラムは、“自己—社会の関係性”の学習（主に初等）→多様な“社会の見方”の学習（主に中等前期）→多様な“社会の見方”をふまえた査定（事象の効果・影響の測定）の学習（主に中等後期）、へとシフトすることがわかった。

以上より、小・中・高を通して多元的な社会認識の形成を促すための一つの方法論が明らかになった。

### (3)小・中・高の歴史教育の授業モデル

これまでの分析をもとにして、次のような日本史「鎖国」の授業モデルを構想した。

小学校では、鎖国までの歩みとその制度下の海外交流の様子を調べ、現在への影響について考えさせる。中学校では、鎖国の背後にある情報管理政策の理論を探求させ、政治的社会的な一般概念の形成を促す。高等学校では、鎖国政策の評価や現在の鎖国論の問い直しを行わせる。

上記のモデルは構想段階であるが、今後、具体化し実践へと結びつけたい。

本研究では、以上のような成果を得ることができたが、体系的なカリキュラムモデルの開発には至っていない。わが国の現状に即した改革のモデルから抜本的な改革のモデルまで、選択肢の幅を広げるよう分析・開発を試みる必要がある。今後の課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①山田秀和「小・中・高一貫社会科における授業構成の基本原則—オハイオ州における各学校段階のLESSンプランを比較分析して—」『弘前大学教育学部紀要』, 査読無, 第 100 巻, 2008, pp.17-26

(<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/handle/10129/785>)

②山田秀和「社会科カリキュラムにおける歴史領域の小・中・高一貫性—オハイオ州の社会科スタンダードを事例として—」『弘前大学教育学部紀要』, 査読無, 第 98 号, 2007, pp.11-20

(<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/handle/10129/244>)

〔学会発表〕（計 3 件）

①山田秀和「『開かれた社会認識形成』を促す社会科カリキュラムの連続性—小・中・高一貫の観点から—」全国社会科教育学会, 2009 年 10 月 11 日, 弘前大学

②山田秀和「小・中・高の歴史教育における連続性と発展性—ニューヨーク州の社会科が示唆するもの—」全国社会科教育学会, 2008 年 10 月 25 日, 宮崎大学

③山田秀和「小・中・高一貫社会科カリキュラムにおける授業構成—オハイオ州の各学校段階に応じたLESSンプランの比較分析を通して—」全国社会科教育学会・社会系教科教育学会（合同大会）, 2007 年 10 月 27 日, 兵庫教育大学

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 秀和 (YAMADA HIDEKAZU)

岡山大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：50400122